

# エンカウンター (ENCOUNTER)

## 第 173号

平成28年9月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

### 内村鑑三「続一日一生」より (5)

5月2日

涙をもって種まく者は、喜びの声をもって刈り取る。種を携え、涙を流して出ていく者は、束を携え、喜びの声をあげて帰ってくるであろう。(詩篇 126・5-6)

神の報いは充分来世において来たりしますが、しかしその一部は現世においても来たります。われらがわれらの種まきの事業において失望せざらんがために、われらが終末の収穫のいかに喜ばしきものなるかを知らんがために、神はこの世においても、われらの労働の結果を与えたまいて、われらの絶えなんとする望みを生き返らしめたまいます。世に喜ばしきこととて、霊の結びし実を目撃するがごときはありません。あるいは10年、あるいは20年、地と涙とをそそいでまいた結果として、一人の本当のクリスチャンのできしを見ては、わが靈魂は、天にも昇らんかと思うばかりに喜ばしくあります。一人の同胞が、宇宙万物の造り主なる父なる神を発見したの

であります。そうしてわれがこの発見をうながすための機関となつたとのことでもあります。歡喜の極、満足の極とは人をその造り主に導いたことを知った時の感であります。

5月3日

アモスはアマジヤに答えた、「私は預言者でもなく、また預言者の子でもない。わたしは牧者である。わたしはいちじく桑の木を作る者である。ところが主は群れに従っている所からわたしを取り、『行って、わが民イスラエルに預言せよ』と、主はわたしに言われた」。 (アモス書7・14-15)

異端、異端という。しかし実は世に異端ほど尊いものはないのである。世に異端があればこそ、進歩があるのである。預言者は異端であった。イエスも異端であった。パウロも異端であった。ルーテルも異端であった。ウエスレーも異端であった。異端であったからこそ、彼らは今日なお世に勢力があるのである。

異端は独創の思想である。真理を採研するにあたって、人のオーソリティーにたよらないことである。異端は真理の直参（じきさん）である。その陪臣でない。人にはかまわずに一直線に、真理と真理の神とに向かって進むことである。

ゆえに異端は常に新鮮である。陳腐なる異端ではない。異端は多くの誤りにおちいる。しかしながら常に進む。異端を恐れる者は沈黙の危険を冒す者である。老人はことごとく正教に帰依すべきである。しかし青年と壮士とは異端を試むべきである。

5月6日

わたしは乏しいから、こう言うのではない。わたしは、どんな境遇にあっても、足ることを学んだ。わたしは貧に処する道を知っており、富における道も知っている、私は、飽くことにも飢えることにも、富むことにも乏しいことにも、ありとあらゆる境遇に処する秘訣を心得ている。わたしを強くしてくださる方によって、何事でもすることができる。(ピリピ書 4・11-13)

満足の人とは独立の人である。不平の人とは依頼の人である。神と自己（おのれ）とにたよって生存する人には、この世ははなはだ愉快なる所である。しかるにこの明白なる原理を知らないで、他人に恩恵を求めて、その与えられざるを怒り、常に世の無情を憤りながら憂き日月を送る者は、実に愚かなる者である。幸福は常にわが腕と心にある。これを他人の手に求めて、われらに来たるものはただ失望と恥辱と不平とのみである。

5月7日

あなたがたがわたしにつながっており、わたしの言葉があなたがたにとどまっているならば、なんでも望むものを求めるがよい。そうすれば、与えられるであろう。(ヨハネ伝 15・7)

祈りて必ず聞かざる祈禱がある。それは神のみこころのならんことを祈る祈禱である。神のみこころは必ず成る。そのみこころを願いとしてわれらのささぐる祈禱は聞かれざるはない。ここにおいてか人はいう、神のみこころは必ず成るとならば人がこれを祈るの必要はない、人は祈らずとも神はそのみこころを成したもうと。そうでない。神は人と共に働かんことを願いたまう。彼は彼のみこころを人の願いとして成さんと欲したもう。父は子を措いてひとりみずから事をなさんと願わない。子をして父の事業に携わらんことを願う。しかして子と栄光を分かたんことを願う。天父もまた同じである。彼は彼のみこころが人の祈りとして彼に達し、これを成して、人をして神と栄光を分かたんことを欲したもう。まことに愛の神としてさもあるべきである。ゆえに祈るはわが名誉である。神のみこころをわが祈りとしてささぐるを得て名誉この上なしである。しかしてわがこころの神のみこころと一致しわが祈りは神のご計画と一致して、成就せられざるを得ないのである。

5月10日

しかし、わたし自身には、わたしたちの主イエス・キリストの十字架以外に、誇とするものは、断じてあってはならない。子の十字架につけられて、この世はわたしに対して死に、わたしもこの世に対して死んでしまったのである。割礼のあるなしは問題ではなく、ただ、新しく造られることこそ、重要なのである。(ガラテヤ書 6・14-15)

キリストの十字架にキリスト教はある。十字架の道、これキリスト教である。キリスト教にほかに何があっても、もしキリストの十字架がないならば、キリスト教はないのである。キリスト教は道德の道にあらずして贖罪の道である。そして贖罪は十字架の上におこなわれたのである。キリストは人に人道または天道を教えんために世に來たりたまひしにあらず。人類の罪を負いてこれを除かんために來たり給うたのである。キリストの十字架に、この深い普遍的の意味がある。この意味において十字架を解して、聖書と人生とを解しうるのである。

5月14日

弟子たちのうちの多くの者は、これを聞いて言った、「これは、ひどい言葉だ。だれがそんなことを聞いておられようか」。しかしイエスは、弟子たちがそのことをつぶやいているのを見破って、彼らに言われた、「このことがあなたがたのつまづきになるのか。それでは、もし人の子が前にいた所に上がるのを見たら、どうなるのか。人を生かすものは霊であって、肉は何の役にも立たない。わたしがあなた方に話した言葉は霊であり、また命である。」(ヨハネ伝 6・60-63)

まことに信仰の相違はやむを得ない。しかしながら信仰の混同は極力これを避けねばならぬ。私はカトリック、聖公会、メソジストを忌むが、徹底的の彼らには深甚の敬意を表さざるを得ない。要は弁別にある。明白なる識別にある。人の知るごとく、私自身は仏教徒にあらずしてキリスト信者である。ローマ・カトリック教徒にあらずしてプロテスタント主義者である。教会信者にあらずして、無教会信者である。私は、人が、この明白なる理由のために私を憎むならば、憎んでもらいたい。愛するならば、愛してもらいたい。敵に愛せらるるは、味方に憎まるる以上の不幸である。ギリシャ語の diakrisis、英語の discernment, clear thinking, 弁別、信仰上、こんなに大切なものはないのである。

5月17日

あなたの父と母を敬え。これは、あなたの神、主が賜わる地で、  
あなたが長く生きるためである。(出エジプト記10・12)

近代人、ことに青年は、礼儀であると言えど虚礼であると思ひ、  
礼儀を省みざることが誠実であり真摯であると思ふ。礼儀と称せら  
るるもののうちに虚礼のあることは、余輩といえども疑わない。し  
かしながら、礼儀はすべて虚礼であつて、無礼がかえつて誠実であ  
ると思ふは大なるまちがひである。眞の礼儀は、人に対する尊敬で  
ある。人はすべて神のかたちにかたどられて造られたる者、その資  
格において、すべての人が吾人の尊敬を備ふる。ことに吾人の長者  
に対して、彼らがある意味において神を代表して吾人に対する者で  
あるがゆゑに、吾人は神に対する尊敬をもつて彼らに対しなければ  
ならない。そして實際のところ、礼儀のないところに誠実はない。  
適當の礼儀を欠いて、子弟の關係なり、友人の關係なり、そのほか  
人と人とのすべての正しき關係が永久に持続せられたためしはない。  
たとへ夫婦の關係といえども、礼なくして、これを正當に維持する  
ことはできない。礼儀は耐久的關係の必要條件である。



5月18日

キリスト・イエスの良い兵卒として、わたしと苦しみを共にしてほしい。兵役に服している者は、日常生活の事に煩わされてはいない。ただ、兵を募った司令官を喜ばせようと努める。また、競技をするにしても、規定に従って競技をしなければ、栄冠は得られない。労苦をする農夫が、だれよりも先に、生産物の分配にあずかるべきである。(テモテ第2書2・3-6)

神に導かるる障害は最も安全なる生涯である。何びとも、神によるその成功を妨ぐることはできない。また何びとも、われらの競争者として起つことはできない。永久的成功はわれらに保証せらる。神にたよるがゆえに、完全に独立である。彼が命じたもう事をさえ、なせばよいのである。ゆえに、人に頼む必要はなく、媚びへつらうの必要は絶対がない。また生活の心配は絶対がない。神に徴発せられし兵卒である。彼が、わが生活を保証したもうはもちろんである。自分の目的を遂げんと欲するがゆえに生活の心配があるのである。神の御用に服役して、彼が生存の責任をにないたもうは当然である。

5月23日

エノクは65歳になって、メトセラを生んだ。エノクはメトセラを生んだのち、300年、神とともに歩み、男子と女子を生んだ。エノクの年は合わせて365歳であった。エノクは神と共に歩み、神が彼を取られたので、いなくなった。(創世記5・21-24)

人生は短くある。しかも完全である。そのもの自体としては完全でない。されども完全なる生涯に達する準備としては最も完全である。大学校としては完全ではない。されどもこれに入るための予備校としては完全である。その喚起と悲哀、成功と失敗、会合と離別、和親と敵対、熱き涙と堪えがたき苦痛、これみなわれらを完成するために必要である。現世のための現世にあらず、来世のための現世なることを示されて、われらは現世に生まれ来りしことを悔いず、また生涯の短きことを悲しまない。われらは詩人ゲーテにならいて、「この歓喜と悲哀とは何のためなるか」と言いて歎かない。われらに臨みし歓喜と悲哀とはことごとくその目的を達した。われらはこれによりてお幾分なりとも神を知りえた。幾分なりともキリストの満ち足れる程度にまで達した。(エペソ4・13)。われらは過去を顧みて悔恨はない。ただ感謝有るのみである。すべての事は働きて益をなした。この短き人生は、限りなきキリストの国にわれらを導きいれるためになくてならぬものである。

5月28日

こうして彼らの足洗ってから、上着をつけ、ふたたび席にもどって、彼らに言われた、「わたしがあなたがたにしたことがわかるか。あなたがたはわたしを教師、また主と呼んでいる。そう言うのは正しい。わたしはそのとおりである。しかし、主であり、また教師であるわたしが、あなたがたの足を洗ったからには、あなたがたも互いに足を洗いあうべきである。わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたがするように、わたしは手本を示したのだ」。(ヨハネ伝 13. 12-15)

国に尽くさんと欲せば、必ずしも政治または軍事に携わるの要はない。社会に使えると欲せば、必ずしも社会事業に従事するの要はない。我に賦与せられし能力に応じ、わがなすべき事を忠実になせば、それ以上の愛国的行為はない。また社会的事業はない。レンブラントは善き絵を書いて、オランダの名を世界に挙げた。ワーズワスは善き詩を作りて、英民族の風儀を一変した。奉公の道は一にして足りない。美術も音楽も作詞も説教も、忠実にこれをなせば、国を興し民を化するの事業である。必ずしも議会の壇上に登るに及ばず。ひとり書齋にこもりて、教えを万世に垂るることができる。必ずしも慈善事業に従事するに及ばず。教壇に聖書を講じて、事前以上の大事業を施すことができる。わがなすべくこの世に送られし事を忠実になして、われは国家を益し、社会を改め、しかり、全宇宙を動かすことができる。…

5月31日

あなたは知らなかったのか、あなたは聞かなかったのか。主はとこしえの神、地の果ての創造者であって、弱ることなく、また疲れることなく、その知恵ははかり難い。弱った者には力を与え、勢いのない者には強さを増し加えられる。年若い者も弱り、かつ疲れ、壮年の者も疲れ果てて倒れる。しかし主を待ち望む者は新たなる力を得、わしのように翼をはって、のぼることができる、走っても疲れることなく、歩いても弱ることはない。(イザヤ書 40・28-31)

キリスト教は霊的宗教である。キリストはわが靈魂の救い主である。わが繁栄の域は地ではない。天である。かく言いて、われらはもちろん好んで短命に終わるべきではない。使徒ヨハネはよく百歳の寿を保ちて、最も霊的の生涯を送り、最も霊的の福音を伝えた。要は肉に死して霊に生くるにある。地上におけるわが事業の成功を期せざるにある。人の称賛をしりぞくるにある。常に理想を追うにある。終わりまで青年の希望を抱くにある。好んで逆境に立つにある。預言者として生きて教会者として終らざるにある。成功を危険視するに有る。成功に臨んでは、さらに高き理想を求めて生命の固定を避くるにある。この世とその勢力に対しては常に戦闘的態度に立つにある。生命は流動す。凝結しない。生命は抵抗す。征服せられない。願わくば恩恵豊にわれらに加わりて、われらもまた永久に老いず、神の若き子供として存せんことを。